

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370080

研究課題名(和文) 『啓蒙の弁証法』読解と、その前史・後史をふまえた、近・現代「社会思想史」の刷新

研究課題名(英文) Interpreting "Dialectic of Enlightenment" and the Reconstruction of the History of Modern Social Thoughts

研究代表者

高幣 秀知 (TAKAHEI, Hidetomo)

北海道大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：00146995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語論文『ルカーチvs.アドルノ論争への寄与』の前半部分が2016年国際ルカーチ協会年報に『アドルノの「強制された批判」とその背景』として発表され、後半部分は2017年同年報に『背反と可能な収斂の地平』として発表される予定である。これの日本語版に相当する論説については、出版が確約しているものの、その時期が未定である。

ハーバーマス、ホネット等によっておもに担われてきた近年のドイツ「フランクフルト学派」批判理論の東アジアへの展開として、韓国・ソウル大学招待講演「現代日本の状況」(2015年)に続いて、数年内には中国・北京大学での講演「日本における社会・文化理論の検証」を予定している。

研究成果の概要(英文)：Following the first part of my article on the discussion concerning Lukacs vs. Adorno "critique under pressure and its background" (in German. Jahrbuch der Internationalen Georg Lukacs Gesellschaft, 2016), the second part "discrepancy and the horizon of possible convergence" is to be published in the next issue of the same journal(Lukacs 2017). It may also be expected that the Japanese version will be published soon. Concerning the availability of "Critical Theory" of the "Frankfurt School" in East Asia, my presentation at Seoul National University ("Situations in Japan -Towards Critical Theory in East Asia", 2015) will be followed by the next lecture at Beijing University ("Reexamination about socio-cultural theories in Japan") in the forthcoming years.

研究分野：社会思想史

キーワード：批判理論 ルカーチ アドルノ ホネット 存在論 弁証法 社会思想史学

1. 研究開始当初の背景

ホルクハイマー(1895~1973)、アドルノ(1903~1969)らフランクフルト学派批判理論の「第一世代」の原点をなす『啓蒙の弁証法』は、科学技術・デモクラシーの「進歩・発展」にもかかわらず、「何故に人間は、真に人間的な状態に踏み入ってゆくかわりに、新しい類の野蛮状態に陥っていくのか」といった問いを提起していた。しかしながら、こうした事態のトータルな把握と脱却への指針は、決して平明でも容易でもあり得ない。本研究計画において遂行されなければならない第一の課題は、この『啓蒙の弁証法』読解作業を継続・完成させることである。この研究作業は後記5名の研究者達との共同研究「『啓蒙の弁証法』読解」プロジェクトとして2003年に開始されたが、その後、中断を余儀なくされていた。是非ともこのプロジェクトを再開し完遂しなければならない。

申請者は1999年から2001年、日本学術振興会による日独科学協力事業「現代の社会哲学研究」をはじめとして、フランクフルト・ゲーテ大学哲学研究院ホネット教授(1949~)との研究協力関係にはいった。フランクフルト学派の「第三世代」とされる同教授は、その中心たる同大学付属の社会研究所を主宰するとともに、その『承認をめぐる闘争』(1992年)を起点として、世界的といってよい規模での研究上の「交差点」をかたちづくりつつある。例えば、ハーバーマスと晩年のデリダとの「モダン」をめぐる抗争を両者の和解へと導いた事例をあげておく。『物象化』(2005年)では、ルカーチ(1885~1971)への理論的回帰がみとめられる。協力事業の成果のひとつは、フランクフルトにあるアドルノ・アルヒーフの厳重な禁が解かれ、ルカーチの『歴史と階級意識』(1923年)へのアドルノの書き込みを閲覧できたことである。そこには、これまで単なる対立関係と理解されがちであった両者の相違が、アドルノからルカーチへの内面的理解と主題の転位(社会による自然への規定性から自然による社会への規定性)を実相とする旨の文言が記されていた。また、アドルノによる徹底的な「ルカーチ批判」として知られる『強制された和解』(1958年)が三度にわたる改稿の結果であることが確認された。しかし、その論説が何故その時期に、また何故その雑誌に、発表されたのか、との疑念は残っていた。

この問いに答えて下さったのが、ルカーチの弟子達「ブダペスト学派」、現在はニューヨークの社会研究新学院アレント記念講座のヘラー教授(1929~)である。2010年、ブダペストでのインタビューで彼女は、「それはホルクハイマーの指図による以外あり得ない」と断言した。またその前年、東京での対話では、1968年アドルノからルカーチへの和解の申し出がプロッホ(1885~1977)の介入によって中断されたとの内情が説明された。

また上記とは別に、申請者は以前からの研究成果として、日本の福本和夫(1894~1983)の証言、フランクフルト「社会研究所」創設の主導者ヴァイルの自伝草稿、等に基づいて、1923年の「第一回マルクス主義研究週間」が『歴史と階級意識』をメイン・テキストとして開催されていた事実を確定している。そうだとすると、著名な「批判理論」史研究家・UCバークレー校のジェイ教授などを発信源として流布してきたイストワール、すなわち「1922年の研究集会、続いて社会研究所の設立、そしてずっと跳んで、1930年のホルクハイマーの所長就任」(『弁証法的想像力』、1973年)といった「物語」は、相当程度の補正を求められていることになる。

以上、「批判理論」の発端から「第一世代」にかかわる範囲においても、またとりわけルカーチ vs アドルノ問題についても、更なる歴史的・思想史的事実の確定と思想的・哲学的課題の特定との作業が必要とされる研究段階に達しているのである。

2. 研究の目的

全体主義・ファシズムが制覇したかつての時代の「フランクフルト学派批判理論」の原点として遺された『啓蒙の弁証法』(ホルクハイマー、アドルノ、1947年)を読解する共同研究作業を完遂することを、本研究目的の第一とする。その際、同書の前史としてルカーチ、プロッホ、ベンヤミン等を置き、また後史としてハーバーマス、フーコー、デリダ等を位置づける。前者のうち特にルカーチについてはヘラー教授からの教示、後者については特にアドルノも含めてホネット教授の協力をあおぐ。また、この研究課題の社会思想史的背景を広範にさぐり、「グローバリゼーションの発端」、「デモクラシー論の系譜」、「市民社会と社会主義」、「全体主義と批判理論」を主題とする『社会思想学論選』(仮題)において、思想史研究上の諸論点の刷新をはかる。

3. 研究の方法

『啓蒙の弁証法』の邦訳は既に1990年、徳永大阪大学名誉教授によっておこなわれている(現在は、岩波文庫)。この翻訳書を手がかりに同書について閑説するものは数知れないが、せいぜい表面的な印象を述べるにとどまっているか、あるいはいくつかの文言を引用して敷衍する程度にとどまっているというのが実情である。ドイツ語圏でも事情はおおきく変わらない。例えば、ヴィガースハウスの詳細な大著『フランクフルト学派』(1988年)からですら、同書の核心的な論述について得るところはすくない。同じアドルノの著作『否定弁証法』(1966年)については、比較的「論理的」であるためか、コメントールがドイツで出版されてはいるが、ことあらためて教えるところは多くない。「研究目的」の第一課題に記したように、『啓

蒙の弁証法』読解への共同作業は、平成15年の「批判理論研究会」発足以来、現時点に至るまで計6回、断続的な研究発表・討議をおこなってきた。また訳者の徳永教授には何度も講演いただき、訳文・訳語の妥当性についてまでも討議してきた。しかし、その対象の決定的な重要性にもかかわらず高度に難解なテキストであるため、課題はいまだその達成途上にあり、本研究計画による完遂を是非とも必要とするところである。共同研究のメンバー、分担、構成は以下の通りを予定している。

『啓蒙の弁証法』読解（仮題）

総論 『啓蒙の弁証法』の思想史的位置と意味 高幣秀知（北海道大学名誉教授）

第一章 啓蒙の概念 古賀徹（九州大学准教授）

第二章 オデュッセウスあるいは神話と啓蒙 麻生博之（東京経済大学教授）

第三章 ジュリエットあるいは啓蒙と道徳 上野成利（神戸大学教授）

第四章 文化産業 大衆欺瞞としての啓蒙 龍村あや子（京都市立芸術大学教授）

第五章 反ユダヤ主義の諸要素 啓蒙の限界 細見和之（京都大学教授）

結論 『啓蒙の弁証法』以後の批判理論 高幣秀知（北海道大学名誉教授） 細見和之（京都大学教授）

『啓蒙の弁証法』の最後に付された「手記と草案」部分については、啓発的ではあるが殆んど断章であるため、メンバーの各自がそれぞれの関心から選択するよう申し合わせている。

『社会思想史学論選』（仮題）の執筆について、以下の範囲では、現時点での問題関心の一端を記しておく。

第一章 グローバリゼーションの発端

ルネッサンスと宗教改革を出発点とした旧来の図式は世界システム論的アプローチによってすくなく容れざるが、東・南アジアの近代においてそれがどのように妥当するか、歴史学の成果をも参照しつつあらためて、この非対称的世界の発端と現実を考究する必要がある。

第二章 デモクラシー論の系譜

ホップズ、ロック等に対する批判者としてのルソーに焦点をおいて、そのドイツ観念論への展開と変容を検討し、現代の自由論、正義論への接続をはかる。「一般意志」というその根本概念についてすら、混乱した解釈がおおい現状にあって、必要な作業と考えられる。

第三章 市民社会と社会主義

マルクスによる市民社会の「哲学的」批判概念としての疎外の事態が自明とすらなり、「政治経済学的」批判概念としての物象化の現象が全面化するなかで、市民社会そのものの生産・再生産の可能性問題までもが浮上し

は始めている。「社会主義」とは何であったのか、市民社会とは何か、という問題の原理的再審が要求される。

第四章 全体主義と批判理論

「全体主義」についての政治学、経済学、文化理論そして科学・技術史の成果を通覧したうえで、ハーバーマスが依拠していたウェーバーの合理化論、ルカーチの弁証法から存在論への試み、アドルノの云う意味での「感受性の現象学」を検討する。それらの試みのそれぞれに刻印された過酷な時代経験を越える《現象学》は、ヘーゲルを転換するかたちで、どのように構想されるのか、すくなくともそうした問題場面が設定されなければならない。

4. 研究成果

研究計画3年終了の後、次年度使用額が生じた理由であるドイツ語論文「ルカーチ vs. アドルノ論争への寄与」の執筆については完了し、つぎの「雑誌論文」欄に記すように、その前半部「アドルノの〈強制された批判〉とその背景」が国際ルカーチ協会年報2016年号に掲載された。その後半部「背反、そして可能な収斂の地平」については同年報2017年号に掲載されることが確定している。

また2016年12月には、「ハンガリー学会」主催のもとに早稲田大学にて招待講演「ルカーチ、フランクフルト学派、そして近況へ」をおこない、その内容が論集単行本として出版されるとの見通しのうえで、論稿「1956年ハンガリーと晩年のルカーチ」を2017年4月現在ほぼ脱稿しおえたところである。

上記二点はいずれも本研究課題『啓蒙の弁証法』読解と、その前史・後史をふまえた、近・現代〈社会思想史〉の刷新にかかわるものである。「読解」作業そのものについては残念ながら現時点ではいまだ分担執筆者全員の論稿が出揃うには至っていないが、課題の決定的重要性に鑑み、共編者として督促を重ねているところである。その作業完結は間近であり、その成果は、「近・現代〈社会思想史〉の刷新」という課題部分『社会思想史学論選』（仮題）の第4部「全体主義と批判理論」の基幹部分をなす研究編成として位置づけられる全体計画のもとにあるからである。

(1) 方法としての構想力という問題群の探究、(2) 『啓蒙の弁証法』における基礎概念の批判的検討、(3) 近代からこの現代にわたる〈社会思想史〉上の諸論点の通時的・共時的再考、これらが、本研究以後に続く課題となっている。これらの研究課題については、カント、カッシーラー、サルトル、三木清などの「構想力論」、宇野弘蔵の「経済原論」、丸山眞男の「政治学」、福本和夫の「文化論」等々の成果と問題点をもあわせて検討する作業を前提としている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Hidetomo Takahei, Die Diskrepanz und der Horizont einer möglichen Konvergenz: Ein weiterer Beitrag zur Diskussion Lukács vs. Adorno (2), Lukács 2017: Jahrbuch der Internationalen Georg Lukács Gesellschaft, 2017, 印刷中、査読有

Hidetomo Takahei, Adornos "Erpresste Kritik" und deren Hintergründe: Ein weiterer Beitrag zur Diskussion Lukács vs. Adorno (1), Lukács 2016: Jahrbuch der Internationalen Georg Lukács Gesellschaft, 2016, S.89-107. 査読有

高幣秀知、「疎外・物象化批判と戦略問題」、『季報・唯物論研究』132号、2015年、46-56頁、査読有

〔学会発表〕(計3件)

高幣秀知、「ルカーチ、フランクフルト学派、そして近況へ」、ハンガリー学会(招待講演)、2016年12月23日、早稲田大学(東京都新宿区)

Hidetomo Takahei, Situation from Japan: Towards Critical Theory in East Asia, 2015 SNU-HU Joint Symposium: Compressed Modernity and Liberalism in Asia, 2015年11月27日、ソウル国立大学アジアセンター(韓国・ソウル市)

高幣秀知、「アドルノ vs. ルカーチ再考」、北海道大学思想史研究会、2014年8月30日、北海道大学(北海道札幌市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

高幣秀知、書評「暗鬱の中の明察、明察の中の暗鬱」(ヴァルター・ベンヤミン『歴史の概念について』未来社、2015年)、『週刊読書人』3107号、2015年、4面

高幣秀知、書評『フランクフルト学派：ホルクハイマー、アドルノから21世紀の批判理論へ』(細見和之著、中央公論新社、2014年)、『週刊読書人』3069号、2014年、6面

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高幣 秀知 (TAKAHEI Hidetomo)
北海道大学・文学研究科・名誉教授
研究者番号：00146995

(2) 研究分担者

(なし)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(なし)

研究者番号：

(4) 研究協力者

(なし)